

博士課程教育リーディングプログラム 平成27年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成23年度		
申請大学名	北海道大学	申請大学長名	山口 佳三
申請類型	オンリーワン型	プログラム責任者名	新田 孝彦
整理番号	F01	プログラムコーディネーター名	堀内 基広
プログラム名	One Healthに貢献する獣医科学グローバルリーダー育成プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

<プログラムの目的>

「One World - One Health (一つの世界, 一つの健康)」という概念が示すように, 地球上の生態系の保全は, ヒトおよび動物の健康の両者が相まって初めて達成できるものである。その実現と維持のためには, ヒトと動物の健康維持に向けた取り組みが必要である。感染症および化学物質による健康被害からヒトと動物の健康な生活環境を守るために, ヒトと動物の健康維持および生態系の保全を担う使命を持つ獣医師および獣医科学の寄与が世界的に求められている。そこで本プログラムでは, 「One World - One Health」の実現に向けて, 我が国のみならず世界の獣医科学の発展に寄与することのできる人材の育成に加え, 感染症病原体とそれによって引き起こされる感染症, ならびにケミカルハザードの本質とそれがヒト, 動物および生態系に与える影響に関して, グローバルな視野と俯瞰力を持って当該分野の教育研究の推進および対策にリーダーシップを発揮できる人材を育成することを目的とする。

<大学の改革構想>

本学では第二期中期目標として, 「国際的通用性を持つ柔軟な大学院課程を構築する」こと, 「教育の国際的通用性を向上させ, 学生の国際的流動性を高める」ことを掲げ, 平成22年度に①本学の教育研究組織間の連携を強化し, 教育機能の向上を図ることを目的として高等教育推進機構を設置するとともに, ②外国人留学生の受入支援, 国際的な人材育成を目的として国際本部を設置した。さらに平成24年度から高等教育推進機構に大学院教育部を設置して, リーディングプログラムの推進と大学院共通教育の企画・調整を行っている。また, 同じく第二期中期目標として, 「世界水準の優れた研究者育成のための諸方策を次世代にわたる長期的な視点で継続的に実施する」ことを掲げ, 平成21年度に博士課程学生等のキャリア形成の支援を目的として全国で初めて人材育成本部を設置し, 若手博士研究者の社会進出を重点的に支援している。本リーディン

プログラムでは、人材育成本部と連携して博士課程学生のキャリアパス支援の体制を一層強化していく。

本リーディングプログラムで実施する①外国人特別枠を設けて優秀な外国人留学生を獲得する入学者選抜制度、②英語により行う教育の強化、③海外のフィールドや機関での実践的な演習やインターンシップを取り入れた国際舞台における教育の単位化は、本学の中期目標を達成するための全学的なモデルケースとなる取組であり、国際本部とも連携しながら国際化を推進していく。さらに、本リーディングプログラムで構築する授業科目を本学の特徴の一つである大学院共通教育の充実のために活用し、医学、歯学、薬学、その他の生命科学系の研究科の授業科目を充実させることで、全学的な大学院教育の改革を推進する。

2. プログラムの進捗状況

- ・平成24年度から開始した年次進行型の大学院カリキュラムの完成年度となる。1年次に開講する獣医科学基礎科目およびアカデミックイングリッシュ、2年次に開講する人獣共通感染症対策専門特論、ケミカルハザード対策専門特論、および先端獣医科学特論を着実に実施した。
- ・第一期生11名を輩出した（平成26年3月短縮修了者1名、単位取得退学者1名を含む）。うち、6名が人獣共通感染症対策専門家養成コースを修了し、2名がケミカルハザード対策専門家養成コースを修了した。民間企業に職を得た学生が3名（うち2名は海外）、大学教員となった学生が2名、大学を含め研究機関の博士研究員としてのキャリアをスタートさせた学生が6名である。
- ・単位認定を伴う海外活動である、海外実践疫学演習/海外共同研究演習に16名を派遣した。主な派遣地（活動内容）は、米国国立衛生研究所(プリオン病の診断に関する共同研究)、ザンビア（フィロウイルス、蚊媒介性ウイルスのフィールド調査）、モンゴル（ダニ媒介性感染症のフィールド調査）、ベトナム農務省（鳥インフルエンザウイルスのサーベイランス）、アリゾナ州立大学（野生動物モニタリングに関する共同研究）等である。同じく単位認定を伴う海外/国内インターンシップに20名（海外19名、国内1名）を派遣した。主な派遣地（活動内容）は、WHO環太平洋事務所（フィリピン、感染症発生状況調査）、WHOベトナム事務局（薬剤耐性菌対策）、JICAモンゴル事務所（モンゴルの獣医学教育改善）、OIE東京事務所（OIE/FAO/WHOワークショップの運営とOIEの業務体験）、米国国立衛生研究所(BSL4レベル病原体取扱トレーニング)、サスカチュワン大学（カナダ、環境汚染物質測定手法）等である。インターンシップでは、WHO、OIE、JICAなどの国際機関との間で双方向の人的交流を伴う協働教育体制を強化して、これらの国際機関に学生を派遣できた。これらの活動について、帰国後報告会（使用言語：英語）を開催して大学院生間で情報を共有する取り組みを継続した。
- ・英語教育担当の外国人特任助教により、必修単位のアカデミックイングリッシュの内容の向上と、学生のニーズと能力に応じた、オーダーメイド式の英語クラスを多様化して、学生の英語力の向上に努めた。また、独自の英語能力評価テストSpeaking and Listening Proficiency Test for International Interaction (I-SLPT)を開発した。
- ・One Health、リーダーシップ、国際舞台での活動、大学院教育の将来像など、本プログラムに重要なコンセプトについて、グループ討論して理解を深め、より明確なイメージを持つことを目的としたワークショップを2回開催し（使用言語：英語）プログラムの理解とグローバルリーダーの具体的なイメージの醸成に努めた。
- ・前年度に導入したりサーチアドバイザー制度に基づき、所属研究室を超えた複数名の教員（学外の専門家を含む）による指導体制の実質化を進めた。
- ・本プログラムで導入した大学院入試の特別選抜である、外国人特別選抜と自学部外（日本人）特別選抜を継続して各4名を選抜し、多国籍かつ多様なバックグラウンドを有する学生が参集する修学環境の構築に務めた。

- **Brain Circulation Scheme for One Health**で2名の海外の研究者・実務担当者を2ヶ月間招聘し、大学院授業への出席を通じた大学院学生との共同学習、大学院学生への講義、および共同研究等で大学院学生とともに活動し、国際ネットワークの構築および異文化交流を含め国際感覚の醸成に努めた。
 - ダブリン大学との大学院教育の連携を目指して、学生交流プログラムを継続した。本年度は、教員5名、大学院学生10名をダブリン大学に派遣して、大学院授業モジュール**Advances in Infection Biology**の受講、研究発表、文化交流等のプログラムを実施した。
 - 学生の経済支援の一環として、平成27年度は継続審査および新規受給者の審査を経て36名の学生に奨励金を支給した。また、8名をリサーチアシスタントとして雇用して研究補助業務に、64名をティーチングフェローもしくはティーチングアシスタントとして雇用して教育補助業務に就かせた。
 - 学生の研究企画立案および推進能力の向上を目的として、大学院学生科学研究費を公募し、競争的環境下で35名の学生の研究計画を採択した。
 - 大学院学生が自主的にイニシアティブを持って企画運営する研究討論会「**Progress**」および講演会「**Leading Seminar**」を継続実施し、**Progress**を12回、**Leading Seminar**を4回開催した。若手教員で組織する学生支援委員会がこれらの活動の円滑な推進を支援した。
- 以上、プログラムのさらなる改善、発展させるための取り組みを導入しつつ、着実に推進した。